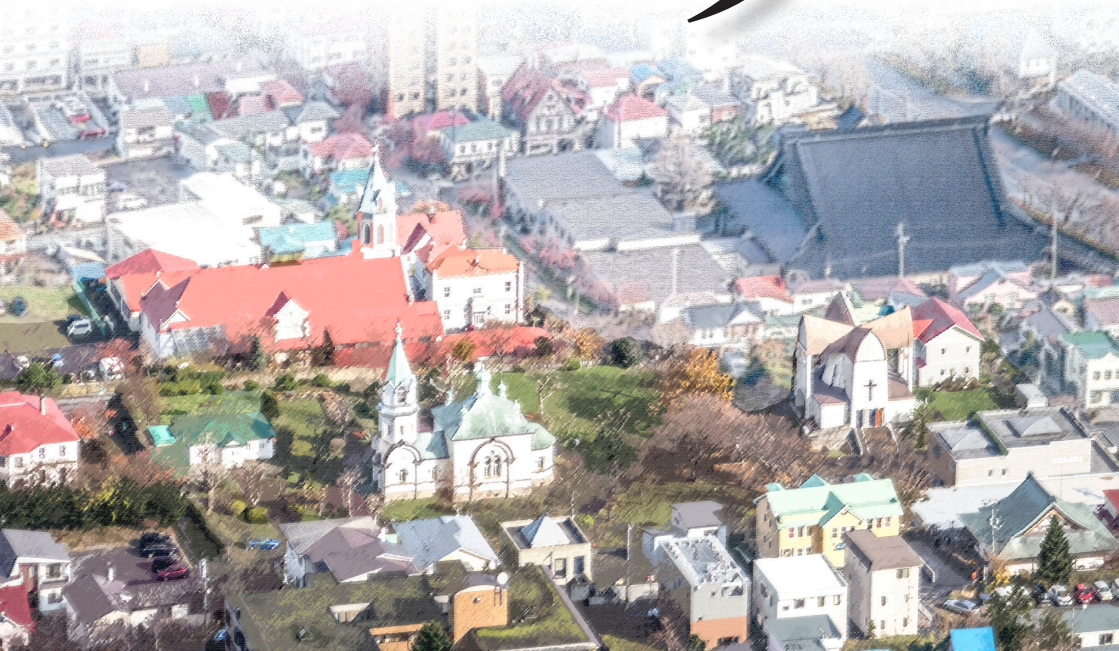
2017

第23回
函館港イルミナシオン映画祭
第21回シナリオ大賞
準グランプリ

函館ハンチング

松本 稔



【作者プロフィール】

まつもと　みのる

１９６５年埼玉県生まれ。ＣＭ制作会社勤務のあと、いろいろあってシナリオライターに。現在に至る。

【あらすじ】

若い頃に映画スターと喧嘩したことがある。地味な人生を送ってきた父の数少ない自慢話だった。しかしそれを息子の満も他の家族も、戯言だと思い誰も信じていなかった。

函館で暮らす父・宗彦がある日、意識を失い倒れ、満は東京から函館へ向かった。

父と息子は、擦れ違い不仲が続いていた。満の結婚に宗彦が反対したこと、満がシナリオを書いた映画を宗彦がけなしたことなどのいさかいが重なり、満は宗彦を避けていた。

満は鳴かず飛ばずのシナリオライター。四十半ばを過ぎ、アルバイトを続け、才能の無さを愚痴りいつも泣きごとばかり。妻の加代子からは惰性でやっていると呆れられていた。

宗彦は函館の病院の集中治療室に入ったが、依然、意識は回復しなかった。

父の部屋のカレンダーに、映画館の名前と時間がメモされていた。満がその日時に行ってみると、父と同年代のスター俳優・宝生匠の主演作が上映されていた。満はこの俳優を殴ったと父が昔、言ったのを思い出した。

トークショーを終えた宝生匠に満は話しかけてみた。父が若い頃に函館の空き地で宝生さんと喧嘩したっていうんですよと。覚えているよと宝生が微笑んだ。スターの優しい嘘だと分かったが、満はそれを病室

の父に告げ、父は一瞬だけ瞼を開けた。それからしばらくして宗彦は亡くなった。

四十九日を過ぎたある日、ラジオ局の知り合いから、ラジオドラマの企画募集があると声をかけられた。妻加代子の後押しもあり、若い頃スターと喧嘩した事を自慢にする父をモチーフに企画を書き、身を入れて懸命にシナリオを書いた。そしてそれはラジオドラマとなった。父を演じたのは宝生匠だった。

その打ち上げの席で宝生匠が言ったある言葉に、満は息をのんだ。あの言葉は優しい嘘などではなく本当のことだったのだ。父はいつも本当のことを言っていたのだ。

父は最期まで懸命に生き、自分に物語を遺してくれたのだと、満は父に感謝した。

【登場人物】

杉本　満（47）　バイトを続けている売れないシナリオライター。
杉本宗彦（80）　満の父
杉本加代子（42）　満の妻
杉本宏（45）　満の弟
杉本雪子　満の母（故人）
二十代の若いリーダー
　満のバイト先の主任
田所恭平（31）　満のバイト先の同僚
伊達（47）　パブ・エイトのマスター
奥野幸一（70）　満の叔父（母・雪子の弟）
倉沢茂子（79）　満の叔母（父・宗彦の妹）
剣持友春（39）　満のシナリオライター仲間
諸星貴也（50）　映画プロデューサー
小田島祐太（35）　映像制作会社のプロデューサー
川崎（80）　宗彦の家の隣の家の女性。
宝生（ほうしょう）匠（たくみ）（80）　有名俳優

1　物流倉庫・中

関東の隅の巨大な物流倉庫の中。
ここは通販会社の物流センターだ。
何百と並ぶ棚には、大量の本やＤＶＤ、日用雑貨、玩具、文房具などの商品が置かれている。
注文書を見て商品を取り、カートに乗せて慌しく運ぶアルバイトの人々。
杉本満（47）、忙しなく棚の商品を取るが、床に落とし、そして拾い上げる。
管理する二十代の若いリーダーが満の働きぶりを見て、

リーダー「杉本さん」
満「……はい」
リーダー「動き悪い」
満「……」
リーダー「しかもミス多い」
満「……すみません」
若いリーダー、蔑むように満を見て、
リーダー「生産性低すぎ。もう二年目でしょ、このままだとやばいよ、次の契約更新」
満「……はぁ」
リーダー「まあ、中年になるとくたびれるのもわかるけどさ、がんばってよ」
満「……」
リーダーが場を去り入れ違いに、同じアルバイトの田所恭平（31）がカートを押して満の隣にやってきて、
田所「気にすることないっすよ」
満「（苦笑い）……」
田所「適当にやりましょう」
満「（苦笑いでうなずく）……」

田所「杉本さんって、何かやってる人なんですか？」
満「……？」
田所「ていうか、何かやってて、しくじってここ？」
満「……」
田所「なんか、これが本業って感じしないし」
満「いや、とくに……」
田所「よくいるんですよ、ここ。バンドとか演劇とかやってたり、小説書いたりとかしてる人。そういうことやってんじゃないんですか？」
満「……いやとくに」
田所「ほんとはすごい人だったりするんじゃないんですか？」
満「すごけりゃ、こんなとこにいないよ」
田所「こんなとこか……」
満「いや、そういうわけじゃないけど……」
田所「いいんですよ、おれもそう思ってるし。俺もマンガ描いてるくちですから」
満「そうなの」
田所「そのうち抜け出しますよ、こんなとこ」
満「……」
リーダーがこっちを見ていて、
リーダー「杉本さん、さぼらないで！　そうでなくても動き悪いんだから」
満、その声で仕事に戻り、田所はそこから離れていく。

2　マンション・外観

東京・中野の町中にあるマンション。

3　満の部屋〜ＬＫ

仕事部屋ではあるが狭くて、本やＤＶＤが乱雑に置かれている。
パソコンの前に座りカタカタカタとキーを打つ満。
ドアが開き、妻の加代子（42）が顔を覗かせる。
加代子「ねえ、大丈夫？　お金」
満「……」
満、プリンターのスイッチを入れる。
加代子「今月はちゃんと入れてもらわないと、やっていけないよ」
満「……」
加代子「大丈夫なんだよね？　私、あなたを食べさせていく気ないからね。そもそも私の給料、そんなにないし。困るよ」
満「うん」
プリンターから出た原稿を手にとり、
満「あのさあ」
加代子「？」
満「ちょっと、これ、読んでみてくれない」
と、原稿を加代子に渡そうとする。
しかし、加代子は受け取らずに、ドアを離れて、さりげなく逃げるようにキッチンへ。
加代子「……」
満、その加代子を追うように、
満「映画のプロットなんだけどさ。地方の女子相撲部のハナシなんだけどね」
加代子「今、時間ない」
満「短いから。いいじゃん」
加代子「わたしにも都合があるの。自分の

都合ばっかり押し付けるんだよね、いつも」
満「明日提出だからさ、ちょっと感想聞きたいんだよ。さくっと読んでよ、今暇そうじゃん」
加代子「ヒマじゃないの。化粧落としたり、お風呂入ったり、ライン返信しなきゃだから、今はムリ」
満「もの書きの妻なら、フツウ、夫の書いたもの読んでくれるだろ」
加代子「フツウとかよく言えるね。自分はあきらかに、フツウ以下でしょ」
満「……」
加代子「めんどうなやつ」
満「……」
加代子、洗面台でクレンジングクリームを手に取り、顔に塗りながら、
加代子「言っとくけど、読みたくなくなるようにしてるの、そっちだからね」
満「……」
加代子、クリームを塗りながら、ソファにどかっと座り、
加代子「真剣に読んで、素直な感想言ってるのに、ちょっとでも気に入らないと、怒るし、ふてくされるし。そういう狙いで書いてるんじゃねーんだとか言うし。ウソでもホメなきゃ納得しないんでしょ？」
満「……」
加代子「いっちょ前に、モノ書きとか言うけどさ、もう何年、ものになってない？映画も公開されてないし、テレビのド

ラマだって放送されてないよね、満の書いたもの、なーんにも。シナリオライターって名乗れる？　脚本家って名乗っては恥ずかしくない？」

満「……」

加代子「それだって、どーせ、また実現しない企画なんじゃないの？」

満「……」

加代子「お金にならない仕事、いつまでやってるの？」

満「いや、だから、もうすぐ……」

加代子「つきあう時、もうすぐシナリオライターで成功して食わせてやるからとか言ってさ。もうあれから何年たった？」

満「……いや、だから来月にはクランクインするシナリオがあるんだって。ほら、面白いって言ってくれたじゃん。学園もので ミステリーっぽいやつ。全国公開だし、ぜったい話題になるよ。そしたら、俺、なんとかなるからさ」

加代子「あてにしてない」

満「いやいやいや、大丈夫だって、今度こそ」

加代子「そんなわけないじゃん」

満「信じろよ」

加代子「ムリ」

満「俺だって、精一杯やってるんだよ。新人のシナリオコンクールだって何本も応募してるしさ。この歳で新人って恥ずかしいけどプライド捨てて応募してるんだぜ」

加代子「そういうアピールがなんか女々しいのよね」

満「……」
加代子「もっとがんばんなよ」
満「がんばってるって。これ以上、どうやってがんばるんだよ」
加代子「そうは見えない」
満「がんばってるじゃん」
加代子「惰性って感じ？」
満「……」
加代子「とにかく、今月の家賃と生活費、ちゃんとしてね」
加代子、テレビのスイッチを入れる。
満「……」
加代子「お金、入れてくれないなら、来月の函館、あたし、行かないからね」
満「……」
原稿を持って、自分の部屋へ戻る。

4

函館の街中

およそ一ヵ月後。
函館市電が走る大通り。
道の向こうに見える港。函館の風景。
夏の陽射し。

5

函館市電・走る車両の中

礼服姿の満と加代子。
路面電車は、海峡通りを東へ走る。

6

青柳町の市電の停留所

停留所に路面電車がとまり、満と加代子がおりてきて、満が加代子を導くように歩き出す。

7　寺の本堂・中

満の母の七回忌法要。

祭壇に母・杉本雪子の遺影が置かれ、十数人の親類縁者が、住職の読経を聞いている。

8　寿司屋の広間

会食の席。親類一同皆席についている。

満の父・杉本宗彦（80）が、挨拶をしている。

その脇には、満。その隣に妻・加代子。父の前には満の弟・宏（45）がいる。

父「本日は妻・雪子の七回忌へご参会いただき、誠にありがとうございます。心ばかりですが、食事を用意させて――（F.O.）」

×　×　×　×

会食がはじまっている。宗彦の妹・茂子（79）が加代子に話しかける。

茂子「体はどう？」

加代子「あ、はい、もうすっかり」

その会話の様子を満は、ちらっと気にしている。

茂子「そう。兄さんから聞いてね。手術、大変だったでしょ？」

加代子「ええ、まあ」

茂子「腫瘍大きかったの？」

加代子「ええ、でも良性だったので。妊娠するにしても影響ないと」

茂子「そう、よかったわね」

加代子「はい」

満、遠めに、その話を耳にしながら料理を口に運ぶ。
母の弟・幸一（69）が、満に話しかける。
幸一「満ちゃん、どう、仕事の方は？」
満「ええ、まあ、ぼちぼちと」
幸一「たいへんでしょ、書く仕事ってのも」
満「……ええ」
そして茂子が満に話しかけてくる。
茂子「すごいよね、賞とるなんてさ」
満「もう何年も前ですから」
茂子「映画になったんでしょ。めったにないことだって、近所の人が言ってたわよ」
満「たんにラッキーでしたから……」
茂子「もーう、謙遜しちゃって」
満「いや……」
宗彦「いやいや賞とっても、できた映画に人がまったく入ってないんじゃ、しょうがねえよ」
満「……（苛立つ）」
宗彦「なんか地味な映画でな、もっと派手にやってくれなきゃな」
満「（宗彦を睨み）わかったようなこと言ってんなよ。カンケーねえだろ。人の仕事にクチ出してんじゃねえよ」
座はしんと静まる。
宗彦、苦笑いで、茶をすする。
宏、加代子、満に目を向けている。
宏「兄ちゃん……」
満「トイレ行ってくる」
と加代子に言い、勢いよく立ちあがると、その拍子で座卓に膝をドスンと引っ掛け、お茶をこぼしてしまう。

茂子が「あらあらあら」と言いながら、その場にあったお手ふきで拭き、加代子もそれを手伝う。満は何も言えずトイレへ向かう。
宗彦は無言で茶をすすっている。

9　寿司屋の手洗い所

満、洗面台の水を出し、顔を洗う。
そこに宏がやってきて、
宏「（満に）何もそんな怒ることないだろ」
満「……」
宏「親父だって、わざわざ映画館に行って観てくれたってことなんだぜ」
満「……」
宏「あのくらいのこと、笑って済ませりゃいいじゃんかよ」
満「……笑えねえよ、あんなこと言われちゃ」
宏「兄ちゃんのシナリオを、もっといい映画にしてやってくれよってことじゃん」
満「……」
宏「褒めるの苦手なの知ってるだろ」
満「……」
宏「大人気ねーよ、兄ちゃん」
満「……」

10　函館市内の道を走る車の中

車の窓の向こうに路面電車が走る。
宏が運転する乗用車の中。
満が助手席にいて、加代子は後部座席。
宗彦も後部座席に座っている。
満も加代子も窓の外の景色を眺める。

宏「兄ちゃんたち、結婚してもう何年になる？」
満「……えっと四年？」
加代子「五年です」
宏「たいへんでしょ、兄ちゃん、好き嫌い多くて。野菜、ぜんぜん食べないでしょ」
満「食べるようになったんだよ」
加代子「でも、漬物とかはダメですね」
満「福神漬けは食べるだろ」
宏「甘いもんは好きなんだよね、口が子どもなんだよ」
満「うるせえなあ」
宏「むかし、冷蔵庫にあったプリン食べたら、ねちねちねちねち言ってきてさ。ねえ、父さん」
宗彦「（ふっと小さく笑う）」
宏「父さんが、見るにみかねて、百円玉兄ちゃんに投げて、これで買ってこいって言ったんだから」
満「……」
宗彦、隣の加代子を見て笑う。
加代子も思わず笑いだす。
宏「俺みたいにならないようにちゃんとしろよ、兄ちゃん」
満「……」
宏「一人暮らしは、やっぱこたえるからね。せっかく家買ったのに出て行かれてさ」
加代子、どう言っていいか分からず、笑っている。
宗彦「（宏に）男のくせにぺらぺら喋るな」
満、窓外の函館の流れる街並を見ている。

宏「（加代子に）男だから喋るんだよね。４ＬＤＫだかんね。無駄に広いの。隣の市なんですけどね、北斗市っていう。親父誘ったけど、来ないって。今の家がいいって。もうガタが来てるのに。でもさ、いつまでも一人じゃいられないからね、親父も」

宗彦「お前となんて暮らせん、いらいらする」

宏「またまたぁ。一人じゃ、さびしいんじゃないの？」

宗彦「どうせ洗濯やら掃除やら、おれに押し付けるんだろ」

宏「ばれた？」

宗彦「（ふっと笑う）」

加代子も笑っている。

満は、その笑いの中には入れない。

11

宗彦の家（満の実家）・外観

函館の住宅街。

二階建ての瓦屋根の飾り気のない家。

庭には所々に雑草がのび始めている。

12

宗彦の家（満の実家）・中

男の一人暮らしの様子で少々散かっている室内。

宗彦、満、加代子、宏がいる。

満、母の遺影と位牌を、仏壇に置き線香を上げる。

加代子、お茶の用意をしている。

宏は散らかった新聞や服などを片付けている。

宗彦、居間に座り、座卓の上を片付けている。

加代子、宗彦の前にお茶を置く。
宗彦「ああ、わるいね」
加代子「いいえ」
宗彦「今日は、つきあってもらって、ありがとう」
加代子、宏と満と自分のぶんのお茶もテーブルに置きながら、
加代子「いいえ、とんでもないです」
宗彦「つかれたでしょ、ゆっくりしてよ」
加代子「あ、はい」
加代子、壁にかかる帽子を見て、
加代子「おしゃれなハンチングですね」
宗彦「(照れたように)そうかい?」
加代子「ええ、とても」
満、庭に目を向ける。
庭には、雑草が生い茂っている。
満「草ぼうぼうだな」
宗彦「ああ」
満「運動がてら、むしった方がいいんじゃねえの? 雑草」
宗彦「……」
テレビ画面には、古いドラマが流れ、ある俳優がアップになる。
宗彦「(テレビを指差し)あ、おれこいつと喧嘩したことあるんだよ」
加代子「(見て)え、そうなんですか?!。宝生匠ですよね」
宗彦「うん、そう。若い頃ね」
加代子「え、友だちだったんですか?」
宗彦「いやいや、そういうんじゃないんだけどね、やつは、函館の、すぐそこの大町のあたりに住んでたことあってね、若

い頃さ」
加代子「そうなんですか」
宗彦「一発殴ってやったんだ」
満、苦笑いでその宗彦を見ている。
宏「(笑って)またその話かよ」
宗彦は宏の言葉に構わず、加代子に、
宗彦「おれの友だちがね、コケにされてさ、宝生匠に。でね、呼び出してさ、一対一で喧嘩するつもりでね」
加代子「勝ったんですか？　お義父さん」
宏「親戚に訊いても誰も知らないって言うしなあ」
宗彦「誰も見てなかったからな」
宏「どうも信ぴょう性うすいんだよな、その話」
宗彦「こっちが殴って、それで向こうもパンチだしたんだけど、おれは避けてね。で、とっくみあいになる寸前に、鉄工所の方から、何やってんだって声がして、二人とも逃げたから決着はついてねえんだ」
満は、話には加わらず、仏壇の水をかえたり、掃除をしている。
宏「都合よすぎない？」
宗彦「あいつの鼻、少し曲がってるんだ。それはおれのパンチのせいだ。謝らないとな、いつか」
宏「いつかって、会うことねえだろ」
加代子「あまり見なくなりましたよね、この宝生匠さんって」
宏「ほら、一時期テレビでばーっと騒がれたんですよ。歩きタバコして子供に火傷させて、おとこのこでよかったとか、昔

はよくあったもんだとか言って、全然反省しないでさ、それからだよね、あんまり見なくなったの」
加代子「ああ、ありましたね、ワイドショーでずいぶん叩かれてて」
宏「うん」
宗彦「若い頃はすごいスターだったんだよ。英語もできるから、向こうの映画出たりさ」
加代子「そうなんですか」
宗彦「おい、満、ネタに困ったら、このハナシ書けよ」
満「（怪訝に）え？」
宗彦「スターを殴った話なんて面白いじゃねえか」
満「そんなつまんねーこと書けねえよ。それほど簡単なもんじゃねんだよ」
宗彦「（テレビの俳優を見て）……」
加代子、満と宗彦の表情を見る。

13　路面電車の中

走る路面電車の中。
帰り道の満と加代子が座っている。
満、ぼんやり外を見ている。
加代子「あのさあ」
満「……？」
加代子「もう少し、お義父さんと、フツーにしゃべりなよ。へんだよ」
満「……」
加代子「子どもだよ、あれじゃ」
満「……」

14　関東の外れの物流倉庫・中

数日後――――。

アルバイト中の満、いつものように商品を掴みカートに乗せる。そこに、リーダーの若い男が近づいてきて、

リーダー「杉本さん、相変わらず、動き悪い」

満「……すみません」

リーダー「がんばろうよ。できないなりに、がんばれるでしょ、おじさんでも」

半笑いで去って行く若いリーダー。

満「……（苦笑い）」

田所がそばにやってきて、

田所「あいつ、階段から蹴り落としましょうか？」

満「（笑い）そうしたいけどね」

田所「杉本さん、人間ができてますね」

満「……」

15　中野の場末のパブ・中

場末の気取らない店。カウンターに座ってビールを飲んでいる満。

カウンターの中には店のマスターの伊達（47）が、グラスを拭きながら満の前で話を聞いている。

満「だけど、なんで続けちゃったんだろ、シナリオライターなんて」

伊達「今さら何言ってんの、好きでなったんでしょ？」

満「……辞め時を失ったよな」

伊達「やめどき？」

満「うん。鳴かず飛ばずのまま、才能ないのにずるずるやっちゃってさ。辞めるき

っかけがつかめなかった」
伊達「それでも仕事が来るんでしょ？」
満「たまーにね。これで終わりかなと思うと、ちっちゃい仕事が舞い込んできて……、ほら、企業の新人研修ビデオとか、情報漏えいに気をつけましょうとか、会社の中だけで見るああいう地味な映像のシナリオの仕事がね、たまに」
伊達「それだって、立派な仕事じゃん」
満「それでも食えなくて、バイトやりながら続けてるんじゃしょーがないよね」
伊達「いつか売れるって」
満「もう四十半ばだよ。四捨五入で五十だよ。いつかなんて来ないって」
伊達「続けてれば何があるかわからないって」
満「そんな簡単に言わないでよ。知らないでしょ、業界のこと」
伊達「（苦笑い）……」
満「才能があればなあ……。ビールおかわり」
伊達、グラスを受け取り、サーバーから生ビールを注ぐ。
満「……親父もお袋も、テレビとか映画なんかとは程遠い仕事してたし。この本読めとかこの映画観ろとかそういう英才教育みたいなのしてくれてれば、もう少しなんとかなったんだけどなあ」
伊達「なに言ってるの、いい大人が」
満「才能じゃなくても、マンションのひとつでも残してくれりゃ、俺もバイトなんかしないで一日中シナリオに集中して、そこそこのいいもの書けるんだけどなあ

……。いいシナリオが書ければ、映画会社とかに持ち込んで、ヒットして、それなりに有名になって……。ウチなんか、女房でさえ、協力してくれねーしなあ……」

伊達「（真顔になり）杉本さん」

満「……？」

伊達「お客の愚痴聞くのも俺の仕事だけどさ」

満「……」

伊達「あんまり聞きたくないね、そういう泣き言は」

満「……（何も言い返せない）」

16　物流倉庫・控え室

仕事を終えた満、携帯を見ると不在着信が入っている。何件も。『宏』とある。

17　駅までの帰り道

携帯を耳にあてながら歩いている。

留守電の声（宏）『（息を切らして）宏ですけど、親父が倒れてた。で、救急車乗せて、今、病院来てる。とにかく電話ください』

満、慌てて、電話をかけて、コール音ひとつで宏が出て、

宏の声「はい」

満「留守電聞いた、どうだよ、親父」

宏の声「今、集中治療室に入ってて――」

焦る満の表情。

18　モノレールの駅〜空港

モノレールの駅の改札をくぐる満。
携帯で話しながら。
加代子の声「お金は？　持った？」
満「うん、なんとか掻き集めて」
加代子の声「気をつけてね」
満「うん」
加代子の声「きっと大丈夫だよ、お父さん」
満「……うん」
満、電話を切り、長いエスカレーターを駆け足で上がっていく。

19　函館の総合病院・中

大きな病院の夜のロビー。
そこに満が駆け込んでくる。足音が響く。
「兄ちゃん！」
満が目を向けると、宏がいて、手招きしている。満はその方へ走る。

20　函館の総合病院・救命救急面談室

若い医師から説明を聞く満と宏。
医師「眠っているうちに意識を失って二日ほど過ぎてしまったのでしょう。脳髄膜炎になってます。その影響で現在、多臓器不全をおこしています」
満・宏「……」
医師「たとえば熱中症などで意識をなくして体に籠った熱が免疫作用を低下させたのかもしれませんね。……ここ数日、ひどく暑かったですからね」
満「……」

医師「正直に申し上げて非常に危険な状態です。最善を尽くしますが、一週間持つかどうか……」

満・宏「……」

医師「意識を回復したとしても、何かしら後遺症があると思われます」

満「……」

21　函館の総合病院・集中治療室・中

何台ものハイテクな機械に囲まれ、何本もの管を挿され、何色ものコードを貼り付けられている宗彦。

小さいが荒い息。全身で生きようとしている。口に装着されたプラスチックの呼吸器が、息のたびに曇る。

白い予防着をつけた満と宏がベッドの脇にいて、

宏「（体をさすり）おやじっ、起きろよ」

満、呆然と父の姿を見ている。

22　函館の病院・集中治療室受付

看護師と満と宏が看護師の説明を聞いている。

看護師「面会はいちどに三十分以内で、中に入るのは三名までお願いします。治療が最優先されますので、面会をお断りすることもあります。ご了解ください」

満と宏、それぞれに頷く。

23　宗彦の家（満の実家）

満、父が寝ていた布団を見ている。

そこには汗や汚物が、染み付いてい

る。

宏「週一では、電話してたんだよ。先週立ち寄ったら、元気だったしね……。民生委員の田中さんから電話があってね、ここ二、三日、外に出てないみたいだって、隣の家から連絡があったってさ。田中さんが電話しても出ないから、様子を見にいってくれって言われてさ」

満「……」

宏、父の寝ていた布団を片付ける。

畳みに染みができてしまっている。

満も片付けに手を貸す。

宏は汚れたシーツなどを丸めてポリ袋へ入れながら、

宏「また朝から晩まで、パチンコでも行ってんじゃねえかって、思ったんだけど、来てみたら、新聞が郵便受けに詰まったままだし、おかしいなって思って玄関開けたら、臭くてさ、こりゃやばいって、駆け込んでね。布団の上で、動かなくてさ……」

満が宏の話を聞きながら、窓を開ける。

庭が見える。

抜いた草が山になっている。

宏「庭の草むしってて、熱中症になったんじゃねーかな」

満「(草の山を見て)……」

宏「……治療室で管につながってる親父見てたらさ、なんか昔のこと思い出したよ」

満「……ん?」

宏「親父、事故起こしてタクシードライバー、

謹慎してたことがあったろ…？」

満「ああ……」

24　満の回想・実家の中

十八年前の家の中――――。

宗彦、居間に寝転がりテレビの競馬中継を見ている。

台所で牛乳を飲んでいる中学生の宏。

宏の声「（前シーンから続き）親父、パチンコ行ってるか、家でごろごろとしているかでさ、家の中どんよりしてただろ。その頃さ、兄ちゃんが言ったんだよ、親父に」

高校生の満が外から帰ってきて、居間に入ってくる。

そして宗彦を一瞥し、

満「俺、大学行かなくてもいいよ。お金、大変だろ、うち」

宗彦がすっと立ち上がり、満の前に立つ。そして、鋭い動きで満の顔面を拳で殴る。素早いパンチが満の鼻筋にヒットする。満は倒れ鼻血が流れる。

宗彦「生意気なこと言ってんじゃねえ」

満、立ち上がり、父にとびかかろうとするが、宏に羽交い絞めにされる。

宗彦は、また寝転がり、テレビの競馬中継を見る。満、宏の手を振りほどき、部屋へ去る。（回想終わり）

25　実家・中

満と宏、部屋の片付けをしながら、

宏「親父のあのパンチ、すげえ速かったよな」

満「うん」
宏「よけられねえよな」
満「頭ぐらぐらきたワ」
宏「次の日、ぼこっと腫れたしな、兄ちゃんの鼻筋……」
満「……」
宏「おれじゃなくてよかったよ」
満「……」
宏「なんかさ、つい昨日みたいでさ」
満「……」
宏「あんな強かったのに、でも目の前にいるオヤジは倒れたままでさ……」
満「……」
間があって。
満「……俺のこと、好きじゃなかったんだよ、親父」
宏「何言ってんだよ」
満「お前の野球の練習とか試合はいつも見に行ってたろ、高校のグランドに。俺のは見に来たことねえもん、近くだったのに」
宏「小さいこと言うなよ。サッカーの事は分からなかっただけだろ」
満「お前の方が気が合ったんだよ、きっと」
宏「……兄ちゃん、いつも反抗的だったからな」
満「……そんなことねえよ」
宏「逆らってたよ、つねに」
満「……」
間があって。
満「……けどさ」
宏「……？」

満「治療代、かなりかかりそうだな……」
宏「……いくらかかってもさ、なんとか復活させてやろうぜ」
満「そりゃそうだよ……」
宏「このまま終わらせるわけにはいかねえだろ、汗とクソにまみれたまま……」
満「……」
宏「独居老人の孤独死なんて洒落にならねえよ」
満「……」
満、ふとカレンダーを見る。
27日のところに〈函館シネマ　1時〉と書き入れしてある。
満「映画行くつもりだったのかな、金曜日……」
宏も、そのカレンダーを見る。
宏「行けねーな、このぶんじゃ……」
満「……」

26　実家・満の部屋

満が十代の頃に使っていた部屋。満はベッドに仰向けになり、天井を見つめる。

27　満の回想・実家の中（宗彦の家）

三年前。
宗彦はとりこんだ洗濯物をたたんでいる。
満が座卓に座り、お茶を入れている。
満「一応、報告なんだけど」
宗彦「……」
満「この前つれてきた西村加代子さんと、

結婚することにしたから」
宗彦「……」
満「来月、婚姻届を出して、式はしないでいいかなって……」
宗彦「病気したんだろ？」
満「え、ああ」
宗彦「大丈夫なのか？」
満「……手術して、もうすっかり治ったよ」
宗彦「子供は大丈夫なのか？」
満「え？」
満「……」
宗彦「産めるのか？」
満「……」
宗彦「妊娠は問題ないのか？」
満「……問題ないって、医者から言われてるよ」
宗彦「宏のやつはすぐに離婚してもう結婚しないなんて言ってやがるし」
満「……」
宗彦「まったく」
満「俺たちも作らないかもしれないよ」
宗彦「何言ってる」
満「そういう選択もあるし」
宗彦「ふざけたこと言うな」
満「なんなんだよ、その言い方。別に孫の顔見せるために結婚するわけじゃないから」
宗彦「何のために結婚する？」
満、立ちあがって部屋の戸を開け、
満「自分たちのためだよ。別に父さんのためじゃないよ」
部屋から出て行く。

宗彦「作らんでどうする。何も残さんでどうする?!」
満「……」
満、靴を履き、玄関から出て行く。
宗彦、ただ黙ったまま座っている。
（回想終わり）

28　函館の病院の売店

満と加代子が宗彦の入院に必要な買い物をしている。タオル、寝巻き、おむつなどを持ち、レジで支払いを済ませる。
満、加代子の横顔を見ている。
加代子「（気づき）？」
満「函館まで来てもらっちゃって悪いな」
加代子「気にしなくていいよ」
満「ほんと、会社大丈夫なのか？」
加代子「有給使うから、平気」
満「そっか」
加代子「嫁なんだし」
と言って笑う加代子。
満はそれを見て、弱い笑みを返す。

29　病院のロビーの隅

満、携帯を取り出し、電話をかける。
満「アルバイトの杉本満ですが、すみません、今日お休みをいただけますでしょうか」
電話の声「どうしました？」
満「家族が急に入院しまして、かなり重篤な状態でして、その看病で…」
電話の声「そうですか、次はいつシフト入ってます？」

満「あさって……です」
電話の声「では、明後日は必ず出勤してください」
満「はい」
プーップーッと電話の切れる音。
満「……」

30　集中治療室・中

全身に白い予防着をつけた満と加代子。
何本もの管につながれ意識のない宗彦。
加代子、宗彦の手を両手で握り、
加代子「お義父さん、元気になって、また楽しいお話し聞かせてください」
満、父の顔をじっと見ている。

31　はこだて自由市場

広いフロアに、鮮魚、青果、乾物などの店が軒を連ねる市場。満と加代子が一緒に歩き、夕飯の買い物をしている。

32　はこだて自由市場・前

満と加代子が買い物袋を抱えて、中から出てくる。
加代子「あ、いかの塩辛、瓶のやつ、やっぱり買ってくるわ」
満「ああ、そうだな」
加代子「待ってて、行って来る」
満「あ、うん」
加代子、中に戻って行く。
満、ベンチに腰掛ける。

駐車場に、大きめのワゴン車が止まり、中から何人もの男や女が出てくる。撮影のスタッフたちのようないでたちだ。
満、それをふと見ている。
その中の一人の男と目が合う。
満「……」
男「あれ、杉本さん」
満「え、あれ、おお……、けんもっちゃん」
男は剣持友春（39）。
剣持「どうしたんですか?!」
剣持、満に近づいてくる。
満「え、ああ」
剣持「あ、ああ、杉本さん函館でしたよね」
満「うん、ちょっとね、帰ってきてて」
「監督、ちょっと一服、みんなで休憩とってますんで」
とスタッフから剣持に声がかかる。
剣持「りょうかーい」
満「……」
剣持「今、ロケハン中で」
満「え？　なに、監督やるの？」
剣持「はい、シナリオ書いて、プロデューサーに持ち込んだら、お前やってみろって言われて。ほら、いちおう、助監督あがりですから、おれ」
満「……すごいね」
剣持「前々から、しつこく持ち込んでたんで、押し切った感じですよ」
剣持、ベンチに座り、二人はそこで話す。
満「え、なに、函館舞台なの？」

剣持「ええ、こっちのフィルムコミッションが熱心に誘ってくれて。地方のね、女子柔道部のハナシなんすよ」
満「そう……」
剣持「あ、こっちは、おれが脚本だけ担当したんですけどね、来月公開されるんすよ」
剣持、ショルダーバッグから、映画のチラシを出す。
鮮やかな洗練されたデザイン。「脚本：剣持友春」とあり、じっと見る満。
剣持「小さい映画なんですけど、東京で単館でやって、全国に広げていこうって」
満「……豪華なキャストだね」
剣持「そうなんですよ、脚本気に入ってくれて、出るって言ってくれて」
満「……そっか。すごいよ」
剣持「いやいやいや……、一時は業界、辞めようと思ったんですけど、最後に好きなもの書いてみようと思って、で、これを監督が気に入ってくれたんで、なんとか首の皮一枚がつながって、まあそれから風向きが変わって」
満「そう」
剣持「やっと映画だけで食ってますよ」
満「そっか……、すごいよ、ほんと」
市場の建物の中から、加代子が出てきて、満を見つける。誰かと話しているので、立ち止まって、その様子を見る。満の声は加代子までに届いている。
剣持「杉本さんは？」

満「うん、こないだまで書いてたシナリオが、秋にクランクインするんだけどね。公開規模、そこそこ大きいみたいでね」
剣持「楽しみですね」
満「あ、うん、まあね、一応オリジナル脚本でね、ミステリーで学園ものでさ。シナリオ読んだ人は、みんな面白」
満の話をさえぎるようにスタッフの声。
スタッフ「監督、そろそろ」
剣持「はい、今行く。（満に）じゃ、また」
満「あ、うん」
剣持はスタッフの方に去って行く。
満、それを見送る。
加代子がそばにやってきて、
加代子「おまたせ」
満「……あ、いま、知り合いに会ったよ。ロケハンやってるんだって」
加代子「そう」
満「うん……」
満、落ち込んだ表情で目を伏せ歩き出す。
加代子、満のその落ちた肩を見ている。

33 函館の書店・中

満、雑誌の棚を見わたしている。
その中に〈月刊シナリオブック〉があり、目をとめる。
満、それを手にとり、レジへ。

34　函館の街中・歩道

満、袋から月刊シナリオブックを出す。

加代子に表紙を見せる。

表紙には「シナリオ大賞・第一次審査通過作品発表」とある。

満「たぶん一次は通ってると思うんだよね」

そういいながら、頁を捲る。

加代子、その満の顔を見ている。

第一次審査発表のページに載っている沢山の名前。目を皿のようにして自分の名前を探し、目を伏せる。

加代子、その顔を見て、

加代子「……」

満、コンビニの前に歩いて行き、ゴミ箱に、その本を捨ててしまう。

35　宗彦の家（満の実家）

室内は以前よりも片付いている。

居間の座卓で、満と加代子が食事をしている。ラジオの音が流れ、無口な二人。

加代子「うん、おいしい、大根いけてる」

満「うん」

加代子「腕あげたね」

満「料理だけはな……」

加代子「やめてよ、卑屈になるの」

満「（苦笑い）……」

サイドボードの上の携帯、ブルブルと震えている。

加代子「……あ、携帯鳴ってるよ」

満、慌ててそれを手にして、画面を見る。

表示には〈諸星P〉とある。
ほっとした表情で、
満「病院じゃなかった。プロデューサー」
加代子「(ほっとした表情)……」
満「はい、杉本です、おつかれさまです」
諸星の声『ども、おつかれ、諸星です』
電話の声は映画プロデューサーの諸星貴也(50)。
満「どもども」
諸星の声『ちょっと……状況が変ってね』
満「どうしたんすか?」
諸星の声『あのシナリオじゃ、監督がやっぱ納得できないっていうんだ』
満「……え」
諸星の声『自分で書き直すっていうんだよ』
満「いや、直すんなら、俺が直しますよ」
諸星の声『そもそもテーマが違うから、全部直すってきかないんだ。このままのホンじゃできないって』
満「いやいや、元々俺が書いたシナリオなんだから、俺が」
諸星の声『(遮り)っていうか、もう書いちゃったんだよ、白井監督。杉本っちゃんのホンとはまるっきり違うもの……』
満「なんすか、それ」
諸星の声『だから、今回、杉本っちゃんの名前、クレジットされない……』
満「っていうか、諸星さんと一緒に作ったんじゃないですか?!」
諸星の声『そうだな』
満「面白いって言ってくれたじゃないですか!? 裏切るんすか!?」

諸星の声『……』
満「俺は納得できませんよ」
諸星の声『いいか、杉本くん。君が納得することは関係ないんだ』
満「……」
諸星の声『白井監督は世間に名前が通ってる。君はまったくの無名だ。監督とは立場が違うんだ』
満「立場とかそんなこと言ってないですよ」
諸星の声『どうすることもできない。がまんしてもらうしかないんだ』
満「そりゃないですよ」
諸星の声『悪いけど、とにかく、そういうことなんだ』
満「……（焦燥から諦め）」
加代子、満のその憔悴したような横顔を見ている。

×　×　×　×

翌朝――。
おきぬけの顔をした満が、窓を開けて庭を見ている。
庭を掃いている加代子。
満、携帯を操作し、耳にあてる。
満「――アルバイトの杉本満ですが、すみません、今日お休みをいただけますでしょうか」
電話の声「どうしました？」
満「家族が入院しておりまして、重篤な状態が続いてまして……」
電話の声「そうですか、次はいつ出勤できますか？」
満「……」

電話の声「いつですか？」
満「わからねーよ、そんなこと。重篤だって言ってるだろ？」
電話の声「……では本日は了解しました。次も　お休みの際はまたご連絡を」
満、電話を切る。
加代子が部屋に入ってきて、
加代子「苛々しないで。ダメだよ、こういう時こそ落ち着かなきゃ」
満「……」

36　病院・集中治療室の前

ガラスの向こうに、意識のない宗彦。
ガラス一枚隔てた場所に、満と加代子がいて、満は白い予防着をつけている。
加代子は予防着をつけようとしてやめる。
満「……？」
加代子「お父さんと二人で話してきなよ。わたしはここで待ってるから」
満「……」

37　病院・集中治療室

電子音が鳴り、波形が動いている。
満は予防着をつけ傍に立ち父の姿をじっと見ている。
ガラスの向こうには、加代子の姿。
加代子、満にうなずきかけて、向こうへ去って行く。
満、父の横に座り、話しかける。
満「おれ、仕事降ろされちゃってさ……。

……新人のコンテストも落ちちゃったよ。一次審査も通らなくてさ、一応、俺、プロなのに、情けないね……。……こんな愚痴こぼされても、困るよね。陰気な話は気持ちが重くなるよな、ごめんな」

意識のない宗彦。

透明な呼吸器に水滴がつき、息のたびに曇る。

満はそれをじっと見ているしかない。

ガラスの向こうに宏の姿が見える。

手でヨッと挨拶し、予防着をつける。

父をじっと見つめている満。

ドアが開き、宏が入ってくる。

宏と満、目で挨拶を交わし、宏はベッドの横に立ち、

宏「おやじ、来たよ。おれだよ、宏だよ。ほら、目ぇ覚ましてよ」

反応のない宗彦。宏、手を握ったり、肩をゆすったりする。

38　宗彦の家（満の実家）

居間に布団が二組敷いてあり、そこに並んで寝ている満と加代子。

暗闇の中、眠れずに寝返りを打つ満。

加代子、目をつむっている。

満、起き上がる。

加代子、目を開けて、

加代子「どうしたの？」

満「……のど渇いたからジュースでも買ってくるわ」

加代子「麦茶なら買っておいたけど」

満「あ、いや、炭酸系がなんか、飲みたい」

加代子「……そう」
満「……うん」
加代子「……気をつけて」
満「うん」

39　函館の町（深夜）

もう路面電車も走っていない。
環状線から魚市場通りを歩いていく。
黄色い消火栓を触ったりしながら、
うつむき、あてもなく歩く。
赤レンガ倉庫の前を通り、港へ向かっていく。

40　函館港（深夜）

満、記念公園をとぼとぼと歩き立ち止まる。すぐ前は海。
深夜なので、人通りはなく、静かだ。
海面の揺れをずっと見ている。その満の表情は悄然としている。
しばらくじっとしている満。
白い自転車に乗った中年の警察官がやってきて、満のそばで止まり、
警官「どうかしました？」
満「いや、べつに」
警官「大丈夫ですか？」
満「……大丈夫……です」
警官「海になにかいますか？」
満「……あのぅ」
警官「はい？」
満「どうして警官になったんですか？」
警官「……どうしてって言われてもね」
満「……ですよね」

警官「……うちは祖父も父も警官なんですよ。だから、そんな流れでね」
満「仕事、面白いですか？」
警官「面白くはないね」
満「やめたくならないですか？」
警官「うーん……、せっかくだからね、続けますよ」
満、警官に小さくお辞儀をして、その場から去って行く。
警官、少し見送って、別方向に自転車で走り去っていく。

41　函館の総合病院・集中治療室受付

満が受け付けで、看護師と話している。
満の後ろの方に、加代子がいる。
看護師「――――病状に変化はないのですが、午前中は治療の都合で、面会は午後にお願いできますでしょうか」
満「……わかりました。また午後にきます」
満、お辞儀をして、加代子にうなずく。
加代子もうなずき返し、その場を去る。

42　宗彦の家（満の実家）・中

満は二人ぶんお茶を淹れている。
加代子、窓を開け、風を部屋に入れる。
満は、座卓にお茶を運ぶ。
加代子「ありがと」
満、お茶をすすりながら、部屋の中を見回す。仏壇の母親の遺影、壁にかかったハンチング帽。

加代子もお茶を飲み、風に揺れるカレンダーに目を向ける。そして今日の日付を見る。〈函館シネマ　午後1時〉とある。

加代子「あ、今日、映画の予定だったんじゃない？　お父さん」

満、カレンダーに目を向ける。

先日、満も見たメモだ。満、そのメモの文字をじっと見る。

加代子「まだ間に合うんじゃない？」

満「……（柱時計を見る）」

43　函館シネマ・外観

函館の街角にある小さな映画館の前。ロードショーも名画もかける映画館だ。本日の上映と貼り紙された当時のポスター〈そよ風の人〉とある。五十年も前の映画なのでレトロチックなデザインだ。

満と加代子、それを見ている。

〈主演：宝生匠〉とある。

満、窓口へ行き、

満「一般二枚、お願いします」

窓口の女性「はい、二枚で三千二百円でございます」

窓口の女性からチケットを差し出す。

窓口の女性「上映後には、主演の宝生匠さんのトークショーがございます」

満「そうですか」

満、お金を払いチケットを受け取り、一枚を加代子に渡す。

44　函館シネマ・中

スクリーンにはモノクロの映画。五十数年前の作品。満、それに見入っている。七十席ほどの映画館。満員である。

アップになる主演の宝生匠。二十代の若々しい表情。スターの輝きがある。

×　×　×　×

上映が終わり、映画館の館主が壇上に出て、マイクを握ってお辞儀をし、

館主「本日は足をお運びいただき、ありがとうございます。いかがでしたでしょうか。これからトークショーに移りたいと思います。それではご登場いただきましょう。〈そよ風の人〉の主演で、函館にもご縁がある宝生匠さんです」

俳優の宝生匠（80）が、壇上に上がる。白髪頭で年相応に老けているが、背筋は伸びていて凛々しい。観客から拍手が沸き起こる。

宝生、観客に手を振り挨拶をする。満と加代子、客席から拍手を送る。

そしてトークショーが始まる。

45　函館シネマ・ロビー

時間経過。

トークショーが終わったようで、扉から観客たちがロビーに出てくる。満も客席から出てくる。

そしてふと見ると何人かの客が宝生匠を囲みサインや握手をねだってい

た。
宝生匠は温和な顔でそれに答えている。
満と加代子は、その輪を見ている。
加代子「お義父さんのこと話してみたら？」
満「（怪訝に）え？」
加代子「きっとお義父さん、宝生さんと話してみたかったんだと思うよ」
満「……」
そして満は、その輪に入るように並び、タイミングを見計らって、宝生匠に声をかけた。
満「あのクラタという男、とても生き生きとして面白かったです」
宝生「（笑みを浮かべ）そうですか」
満「それから、あのう……」
宝生「はい」
宝生、目を満に向けている。
満の少し後ろの方には加代子がいて、二人の会話を見ている。
満「……実は、私の父が、高校生の頃、宝生さんと喧嘩したことがあるっていうんですよ」
宝生「ほう、そうですか」
満「宝生さん、大町のあたりに住んでたことありますか？」
宝生「ええ、満州から引き上げたあとは、あの辺にね」
満「鉄工所の裏の空き地で殴り合いのケンカをしたと、テレビで宝生さんをお見かけすると、よくそう話してたんです」
宝生「お父さんのお名前は？」

満「杉本宗彦です」
宝生匠、何度か小さく頷き、何か思い出した表情。満、その宝生を見ている。
宝生「これ見てごらん」
満「はい……」
と満は宝生匠がさすところを見る。
宝生「ちょいと右に曲がってるだろ、鼻筋」
顔を近づけじっと見てみると、多少、わずかだが歪んでいるように見える。
満「そうですねぇ……」
宝生「その時に曲がっちまったんだ」
満「え？　あ、ほんとうですか？」
宝生「うん、間違いない、これ杉本くんにやられたんだ」
満「あ、え、ほんとうだったんですね……、……いや、すみません、鼻」
宝生匠、目を細めてうなずく。
そこに館主がやってきて、
館主「宝生さん、お車が参りましたので」
宝生「（館主に）ありがとう」
満「（宝生に）ありがとうございました」
宝生「元気にしてるかい？　彼は」
満「…ハイ」
宝生「杉本くんに、よろしくね」
宝生匠、柔らかな笑顔を向け、手を差し出し、満と握手する。
満「はい、伝えます」
宝生匠は軽く手を振り、映画館を出て行く。
満、その後ろ姿を頬を緩め見て、そして、加代子を見る。

満「聞いてた？」
加代子「（うなずく）」

46　映画館・前の道

宝生匠がハイヤーに乗り込み、走り出す。満と加代子、それを見ている。
加代子「お義父さんに言ってあげなくちゃ」
満「（うなずく）」
満、はやる心をおさえつつ駅へ向かって歩き出し、そのあとを加代子が追うように歩く。

47　函館の病院・集中治療室・中

看護師が宗彦の点滴の調整などをしている。
白い予防着を着た満が父・宗彦に話しかける。加代子と宏も、その傍にいる。
満「父さん、すごいよ、さっき宝生匠に会ったんだよ。父さんがカレンダーに印つけてたろ？　だから加代子と一緒に、映画館行ってきたんだよ。そしたらさ、宝生匠がいてね。俺、言ったんだよ、杉本宗彦と喧嘩したんですかって。覚えてたよ、宝生匠。鼻筋を殴ったんだってね。あの人の鼻、まだ曲がってたよ。すごいね、父さん。加代子も宝生さんの話、聞いてたよ」
加代子「はい、ちゃんと言ってましたよ、お義父さんから殴られたんだって」
満「……俺が殴られた時もさ、鼻筋だったろ。すごい速さだったから避けられなくてさ。

宝生匠もあのパンチにやられたんだなって思ったよ」
宗彦の瞼が少しだけ動く。
宏「父さん、信じなくて悪かったよ、本当だったんだね、すごいよ、自慢しちゃうよ」
その時、宗彦の瞼がゆっくりと開いた。
薄目を開けるようにして、半分だけだが、確かに開いている。焦点は合っていないが、その瞳には僅かに意志が感じられる。満、宏、その父の目を見て、父の前に顔を寄せる。
満「父さん！」
宏「親父っ！」
加代子「お義父さん」
しばらくして宗彦の瞼は閉じられた。
宏「お父さん、がんばってくれよ、このまま逝っちまっていいのかよ」
満「父さん！　ほら、目を覚ましなよ。聞いてるのかよ、父さん。いろんな話、もっとしてくれよ！」
満は宗彦の体を揺する。
看護師「乱暴に揺すらないでください。線や管が外れてしまいますから」
満「……すみません」
宏、父の手を強く握る。
電子音が、静かに響いている。

48　函館の病院・集中治療室前

ガラス越しに宗彦の姿が見える。
満と宏、医師の前に立っている。
満「先生、さっき、父の瞼が開いたんです。

たぶん、俺たちの声が届いたんだと思うんです。だから、まだ可能性あると思うんですよ、まだ生きられるって……。だから、ほんと、よろしくお願いします」

と満は深く頭を下げ、宏も下げる。

医師「わかりました、最善を尽くしますので」

医師は会釈して、治療室に入り、診察をして治療を続ける。

満、その様子をじっと見ている。

49　海岸通りのファミレス

満、宏、加代子が窓際の席で食事をしている。向こうには海岸が見える。

加代子「お義父さん、宝生匠さんと会ってたら、どんな話したんだろうね」

宏「決着つけようじゃねえか、とか？」

加代子「（笑う）」

満「……だけどさ、宝生匠は、嘘ついてくれたんだよな。リップサービスだよ、どう考えても」

加代子「……」

宏「（フライドポテトを食べながら）……」

満「……気の利いた嘘をついてくれたんだよ。六十年近く前のこと覚えてるわけねえし、みんな鼻筋なんてちょっとは曲がってるし。おれ、一応、嘘を作るプロなのに、ころっと信じちゃったよ。さすがだよ、やっぱスターだよね」

加代子「……」

宏「でもさ、その嘘で親父は目を開けたんだ。嘘でいいよ。次もさ、なんか親父を喜ばせる嘘考えようぜ」

加代子「そうだよ、何か考えなよ、満」
満「……（苦笑い）」
テーブルの上の携帯がふるえる。
そこに〈函館総合病院〉と表示される。
宏も、加代子も、その文字を見る。
満、嫌な予感で、それを手に取り、出る。
満「はい、杉本です――――」
宏と加代子、その満の表情を見ている。

50　函館の病院・集中治療室

満、宏、そして加代子、宗彦の妹・茂子もいる。皆、予防着をつけて。
沈痛な空気が漂う。医師と看護師が波形を見ている。波形が弱くなり、電子音の間隔が長くなっていく。
宏「（手を握り）親父……」
茂子「（手を握り）兄さん、みんなが来てるよ……」
満、じっと父を見ている。その満の隣には加代子。波形がなくなり、電子音が継続する。医師が脈をとる。
医師「午後10時28分、ご臨終です」
医師と看護師が頭を下げる。満、宏、加代子、茂子も静かに頭を下げる。
満の父・宗彦は息をひきとった。

51　宗彦の家（満の実家）

深夜、満が一人、実家の居間にいる。
祭壇に飾る遺影にする写真を選ぶために、押入れから古いアルバムを引

っ張り出す。アルバムをどんどん捲っていくと、若い頃の父の姿の写真がある。
洒落たハンチングをかぶり、大きく見開いた目でレンズをキッと睨みつけてボクシングのポーズで、少し不良がかっている様子だ。モノクロの写真は色褪せているが、その中の父は若く凛々しい。満、その写真をじっと見ている。
それから、そのページを捲っていくと、徐々に大人になっていく。
他のアルバムにはタクシードライバーの仕事中の写真も。そして穏やかな表情の写真を一枚選びアルバムから剝がす。

その満の様子を隣の部屋から見ている加代子。

52

函館の斎場

祭壇には宗彦の遺影が飾られている。
葬儀が行われ、満、宏、加代子が座り、僧侶によって読経される中、参列者の焼香が続く。

53

函館の斎場・控え室の一隅

火葬を待つ時間。
満、加代子、宏が同じテーブルにいて、

宏「オヤジ、結局、みんなに看取られて、御の字の最期だったよな」

満「……」

宏「粘って粘って、全身で生きようとして

たな」

満「……」

加代子、宏にお茶を注ぎ、お茶がなくなったので、湯を入れに席を外す。加代子が席を外したのを見計らい、満の隣に茂子がやってきて、

茂子「（小声で）満ちゃん」

満「はい」

茂子「宗彦兄さんね、ずっと気にしててね」

満「……」

茂子「（声をひそませ）子供産めるのか、って言ったんでしょ？　結婚のとき、加代子さんのこと……」

満「……あ、まあ」

茂子「言っちゃいけなかったなって、後悔してたみたい」

満「……」

茂子「許してやってね。……何かが途絶えてしまうんじゃないかって、とっても心配だったと思うんだ」

満「……はい」

茂子「……函館の空襲で、兄さんも私も、命からがら逃げてね」

満「……」

茂子「やっぱり、生き残ったって気持ちがあるのよ。せっかく生き残ったんだから、次に何かを残していくことが自分の義務みたなもんだってね、感じてたんだと思うの……、わたしも、そういう気持ちあるしね」

満「……」

54　道〜路面電車の駅

翌日――――――。

満と加代子、大きなバッグを持ち、函館駅へと向かおうとしている。

路面電車の駅のホームに上がり、電車を待つ二人。

満「……なんかさ」

加代子「ん？」

満「取り返しのつかないことしたような気がしてるよ……」

加代子「……」

満「親父の若い頃からの写真見てたら、俺、親父がどんな子供だったとか、どんな青春だったかとか、どんな仕事ぶりだったとか、おれ、なんにも考えてこなかったことに気づいてさ……」

加代子「……」

満「シナリオライターなんて名乗ってるのに……、親父のこと何にも想像しようともしなかった」

加代子「……」

満「もっとたくさん話して、いろんなこと聞いておけばよかったよ……」

市電がホームに入ってくる。

満「……草むしりなんて、なんで言っちまったんだろ。俺が言わなけりゃ……きっとそんなことしてなかったんだ。そしたら倒れてなかったし……。そもそも草むしりなんて俺がやればよかったんだよ……」

加代子「……」

満、路面電車に乗らず、うつむき立

ち尽くしたまま動けない。
その傍には加代子。
二人、ホームに立ち尽くしている。
フェードアウト。

55　中野・マンション・LK

窓際に小さな祭壇があり、満の父・宗彦と母・雪子の遺影と位牌。
葬儀から月日が経った様子。

56　物流倉庫・中

満、商品を取りカートに載せる。以前より手際がよく、速い。若いリーダーが近づいてきて、
リーダー「杉本さん、最近、見違えるようですね。生産性がアップしてますよ。時給アップとか期待していいと思うよ」
満「……」
リーダーが去ったあと、田所が近づいてきて、
田所「最近、張り切ってるじゃないですかァ」
満「やけくそなだけだよ」
田所「…実は、俺、ここ、今日で辞めます」
満「え、そうなの？」
田所「マンガの連載、週刊誌で決まりそうで」
満「……よかったじゃん」
田所「そっちに賭けてみようかと思って」
満「そっか……」
田所「杉本さん、どうですか？　シナリオの方は」
満「え？　あ……」
田所「ネットで杉本さんの名前、検索して

みたら、いくつか、映画とかドラマが出てきて。シナリオライターさんなんですね」
満「まあ……」
田所「お互い、がんばりましょうね」
満「そうだね……」
田所、カートを押しながら去っていく。
満、それを見送って、仕事を続ける。

57　道

バイト帰り、携帯に着信がある。
満「はい、杉本です。ごぶさたです――――」

58　喫茶店・中

どう見ても満より若く見える小田島祐太（35）が、満の前に座っている。
小田島「とつぜん、すみませんね」
満「いやいやいや」
小田島「何年ぶりくらいっすかね」
満「7年か8年ですかね。深夜ドラマ以来ですよ」
小田島「そっかあ。忙しいですか？」
満「そんなわけないでしょ」
小田島「またまたあ」
満「いやまじで」
小田島「実は、転職したんですよ、おれ」
小田島、名刺を出す。そこには〈FM関東　小田島祐太〉とある。
満「（受け取り）え、あ、ラジオなんすか？」
小田島「なんかね、テレビ局にいるより、ラジオの現場の方が、合ってるのかなあ

って」
満「そうなんですか」
小田島「ええ。ＤＪと一緒に番組作ってるんすよ」
満「テレビドラマから、ラジオ番組って、ずいぶん変わりましたね」
小田島「ええ。でね、開局三十周年の企画で、上の方で、ラジオドラマでもやろうってことになったらしくて」
満「……はい」
小田島「テーマは〈家族〉っていうことだけ決まってて、テレビドラマやってたんだから、お前、なんか企画作れよとか言われちゃって」
満「（聞いている）……」
小田島「それでまず、あらすじを提出しないとで……。杉本さん、何か、あらすじ、書いていただけませんか？」
満「……ラジオドラマって書いたことないんですよね」
小田島「大丈夫です、おれも初めてですから」
満「……」
小田島「ただ、これ、他のディレクターもいろいろ考えてて、社内コンペなんです」
満「……そうですか」

59　中野・マンション・ＬＫ

加代子、クレンジングクリームで化粧を落としている。
満は缶ビールを飲みながら、
満「企画が通らなかったら、ギャラが出ないって言うんで、断るつもりなんだけど

ね。まあ、うまく理由つけて」
加代子「やった方がいいんじゃない？」
満「え、あ、そう……？　でもラジオってなあ……、やったことねえし、映像にこだわってきたし……」
加代子「何事にも初めてはあるでしょ」
満「……」
加代子「どーせ他に仕事ないんでしょ」
満「……」

60　中野・マンション・仕事部屋

白い紙を前にして、両手を頭の後ろにあて、宙に目をやり、考えている。そして紙に、軽くボールペンを走らせる。〈なんでもいい　一時間のドラマ　家族の話……〉など小田島に言われたことをメモ書きしてみる。そしてまた宙に目をやり、じっと考える。

61　喫茶店・中

満と小田島、テーブルで向き合っている。
満「考えてみたんですけど」
小田島「はい」
満「えーっと、例えば……、こんなのではどうでしょう」
小田島「……はい」
満、考えているプロットを語りだす。
満「……もうすぐ八十歳を迎える男がいます。妻に先立たれて、一人寂しく暮らしています。男には一人息子がいて――

（F．O．）」

小田島、満のその話に耳を傾けている。

×　×　×　×

満があらすじを話し終わって、

満「――――という感じのストーリーを書きたいと思ってますが、いかがでしょう？」

小田島「じゃ、それでいいです、あらすじにしてみてください、A4、二、三枚でいいですから」

満「はい」

62　マンション・満の仕事部屋

満、パソコンのキーをカチャカチャカタカタと打つ。

満の真剣な横顔とまっすぐな眼差し。

そこに満の声がかぶる。

満の声『男は長年タクシードライバーとして勤め上げて、愛想はいい方ではないが、真面目だけが取り柄の男だ。たったひとつの自慢は若い頃、あるスター俳優と喧嘩し殴ったということだ。しかし、誰も信じていない。男には息子がいて、子どもの頃は面白がってその話を聞いていたが、大人になってからは相槌さえしなくなった』

63　物流倉庫・中

あるバイト中の満。

棚から商品を取り、カートに乗せる。

その満の横顔に、声がかぶる。

満の声『その息子は何かというと反発し、いまだにお互い擦れ違ったままで、断絶状態。男はそれが寂しかった。そんな男が病気となり死の瀬戸際に立たされた。それまで男を毛嫌いしていた息子は、』

64　函館の路面電車の走る街並

宗彦の家のその周囲、路地の風景などに、満の声がかぶる。

満の声『父の唯一の自慢を証明したいと思い、知り合いのつてを頼りに、どうにかこうにか、その俳優の楽屋をたずねた』

65　中野・マンション・LK

祭壇の父・宗彦の遺影。

満の声『だけど俳優は喧嘩したことなど全く覚えていなかった。息子は危篤に陥る男の耳元で、俳優に会いに行ったことを話した』

×　×　×　×

加代子の横顔――――。

キッチンテーブルで、満が書いたあらすじを読んでいる。

前のシーンから満の声が続いている。

満の声『そして俳優があの時殴られたことは一生忘れないと言っていたと嘘をついた。男の口元がかすかに緩み、瞼が揺れた。息子は父に声が届いたのだと感じた。それからしばらくして、男は息をひきとった。息子は父の子どもの頃からのアルバムを見ながら、父の人生を知らなすぎたことに呆然とし、後悔していた。葬式の日、

家族と親戚と知人が集る中、ひときわ大きく鮮やかな花輪とあたたかい文面の弔電が届いた『

満はソファに座り、不安そうな顔で、読んでいる加代子の横顔を見ている。

満の声『それはあのスター俳優からだった。スター俳優の粋な気遣いだった。そして皆、男のあの喧嘩の話を信じ、葬儀のあとには男の話で盛り上がり、賑やかな法宴となった。饒舌になった人たちは、息子が知らない男の話を、たくさん聞かせた。そして、息子は父を誇らしく思えるようになっていた』

加代子、読み終わり、あらすじの原稿をテーブルに置く。

満、加代子に視線を送っている。

加代子「……うん」

満「家族の話とかいいんじゃないかって言われてて。地味すぎかな？」

加代子「これ、お義父さんと満のことだよね？」

満「あ、うん、まあモチーフというかモデルにしたって感じで……」

加代子「前にさ、満、親は自分に何の才能もくれなかったとか女々しく言ってたことあったよね」

満「……まあ、うん」

加代子「すごくいいもの遺してくれたじゃん」

満「……」

加代子「こんな素敵な話、くれたじゃん」

満「……」

加代子「これをシナリオにするの？」
満「あ、うん、まあ、コンペに通ったらね」
加代子「逃げられないよ」
満「……」
加代子「お義父さんが遺してくれた話なんだから。いいもの書かないと、お義父さんに申し訳ないよ」
満「うん、けど、通ったらね」
加代子、満を見ている。

66　物流倉庫前の公園

満、昼休みに弁当を食べている。
携帯が鳴り、出る。
満「はい、杉本です」
小田島の声「どうもどうも。書いてもらった企画なんすけど、コンペ通りました」
満「え、まじっすか？」
小田島の声「なんか社長がすごく気に入ってるみたいで。だから、至急、シナリオにしてください」

67　中野・マンション・満の仕事部屋

満、真剣な目でキーを打ち、縦書きのシナリオを書いていく。時々、髪をかきむしり、考え、眉間に皺を寄せて、そして何か思いつき、キーを打ち、画面に文字を打ち込んでいく。

68　同・寝室

カチャカチャカタカタとキーの音が響く。
加代子、布団の中でその音を聞いて

いる。

69　倉庫前の公園

満、ベンチでノートパソコンを開きシナリオを書く。おにぎりを齧りながら。

70　ラジオ局・打ち合わせルーム

小田島と満の他にも数名のスタッフがいて、打ち合わせが終わった様子で、スタッフたちが立ち上がり、部屋を出て行く。

満の前には、台本が置かれている。

表紙には〈父のストーリー〉とある。

小田島「あとはまかせてください」

満「どうも」

小田島「で、キャスティングなんですけどね、この父の役、杉本さん、だれかイメージしてる役者さん、いますか？」

満「そうですねぇ……」

小田島「おれ、宝生匠さんを考えてるんですけど、どうですか？」

満「え……、あ、すごくいいと思います」

小田島「テレビやってた頃、現場でご一緒したことがあって、とてもいい芝居してくれたもんで」

満「そうですか、できればぜひ」

小田島「じゃ、連絡とってみます」

満「はい」

小田島と満、別々の方向へ。

満、廊下を歩いていく。

71　ラジオ局・スタジオ・調整室

音声のエンジニアや、音響効果の担当、ディレクターの小田島がいて、録音の準備をしている。隅の方の椅子に、満が座っている。

ガラスを隔てたブースには、俳優陣がいて、その中に、堂々とした宝生匠がいる。

満の側に、小田島がやってきて、

小田島「（小声で）マネージャーさんからお聞きしたんですけど、宝生さん、少しセリフ覚えが悪くなってきたらしくて、でもラジオなら、台本持ちながらだから大丈夫だろうって、出ていただけることになりまして」

満「そうなんですか」

ガラスの向こうのブースで、宝生匠が、台本に目をやり、セリフを声に出して練習している。

小田島「あ、紹介させていただきますね」

小田島、満に手招きをして、ブースの中へ。満も入っていく。

72　ラジオ局・スタジオ・ブースの中

小田島と満が連れだって、宝生匠の側へ。

小田島「宝生さん、こちらシナリオライターの杉本満さんです」

宝生「（満を見て）はじめまして」

満、ほんの一瞬だけ言葉につまるが、

満「杉本です。よろしくお願いします」

宝生、手を出して満と握手をする。

満「……」

73　ラジオ局・スタジオ・調整室

録音が始まっている。
ガラスの向こうのブースの中では、宝生匠が、台本を持ち、セリフを話している。
満たちスタッフは真剣に聴いている。
役になりきった宝生匠の声が調整室に響く。

宝生「おれこの俳優と喧嘩したことあるんだよ」
息子役の男「また言ってるよ」
宝生「おれの友だちが、コケにされてな。この俳優にさ。でな一発殴ってやったんだよ。だから、あいつの鼻、曲がってんだ」
息子役の男「どーも信じらんねんだよな、その話」
宝生「やつは、ぜったい覚えてるはずだよ。あんときのこと謝らなくちゃな、いつか」
息子役の男「いつかなんてこねーよ」
調整室の満、それらの芝居にじっと耳を傾けている。

74　中野・マンション・LK

テーブルにラジカセが置かれている。
ラジオドラマが流れている。
コーヒーを前にして、加代子が耳を傾けている。満は、ソファに座り、加代子の表情をちらちらと見る。
ラジオからは息子役のモノローグが流れる。

『――――そして、そのとき、ぼくは、今までより少しだけ、父を誇らしく思えるようになっていた』

それからエンディングの音楽が流れ、ナレーターの声『〈父のストーリー〉演出・小田島祐太　作・杉本満』

とナレーターの声が流れ番組が終わる。

加代子、満を振り向き、にこっとして、

加代子「いいんじゃない」

満「まじ？」

加代子、うなずく。

75　レストラン・前

東京・青山の小洒落たレストラン。

76　レストラン・中

スタッフや俳優たちが集まり席についている。ラジオスタッフなので、それほど多くはなく、８名ほどだ。その中には、宝生匠の姿。そして満、小田島の姿もある。

小田島が立ち上がり皆の前で、

小田島「えー、みなさま、本日はお集まりいただき、ありがとうございます。皆様のおかげで『父のストーリー』、好評をいただき、このたび、全日本放送ドラマ賞のラジオ部門で優秀賞を受賞しまして、このような席をもうけさせていただきました――――」

×　×　×　×

ラジオ局の担当者が乾杯の音頭をと

り、皆、カンパイとグラスを合わせて、飲み始める。
宝生匠の嬉しそうな横顔を見ている満。
宴もいい感じになった頃。
満の座る席と宝生匠の座る席は少し離れている。宝生、スタッフたちを前に、上機嫌で何か話している。
×　×　×　×
満、料理を食べながら、その宝生の声をなんとなく耳にしている。
宝生「わたしね、録音のときは気づかなかったんだけど、あとで出来たのを聴いてたらさ、パッと思い出してね。これとそっくりなことあったんだよ。高校生の時にさ」
満、はっとして、宝生を見ている。
宝生「あ、わたしが殴られたほうなんだけどね。ほら、鼻筋が右に曲がってるでしょ。そいつの顔、思い出せるよ」
満、その話に聞き入っている。
宝生「ハンチング帽をかぶって、目がぎょろっとしてね。工場の裏に呼び出されて、いきなりでさ。もう少し間をとってくるかなと思ったら、右のストレートが顔面に入ってね。よけきれなかったよ。鼻から頭にぐらぐらきたね」
満、宝生の話に引き込まれている。
宝生「わたしも、打ち返したんだけどね。……おれが悪さしてさ、殴られて当然だったんだ」
満、その宝生の話をじっと聞き、そ

して思わず、微笑む。

77　函館・宗彦の家・満の実家・中

函館の実家にやってきている宏、そして満と加代子。三人で、掃除をしている。

加代子が台所を掃除し、宏が廊下を雑巾がけして、満が窓を拭いている。

宏「兄ちゃん」

満「ん？」

宏「おれさあ、北斗の自分の家は売って、この家に戻ってこようと思って」

満「そうか」

宏「いいかな？」

満「それが一番いいよ。なあ（と加代子に）」

加代子「うん」

宏「この家は残しておきたいと思ってさ」

満「（うなずき）……」

宏「ひとりじゃ広すぎるけど、まあ、そのうち……」

満「（笑う）」

満が窓から顔を出しガラスを拭いていると、隣の家の川崎さんが、洗濯物を干しながら、ちょこんと頭を下げ挨拶する。

満「こんにちは」

川崎「お父さん、大変だったわね」

満「いろいろとありがとうございました」

川崎「とんでもない、隣同士なんだし」

満「どうも」

川崎「あれ、見にいったわよ、映画。もうずいぶん前だけど」

満「あ、え、ほんとですか？　どうも」
川崎「あなたのお父さんに見にいってくれって言われてね、券もらったの」
満「ほんとっすか」
川崎「見に行ったあと、どうだった？って訊かれたから、よくわからなかったって言ったら、すごく怒ってね、もっとちゃんと見ろよとか言って、何日か口きいてくれなかったのよ」
満「……」
川崎「がんばってね、いろいろ」
満「あ、はい」
満、川崎にお辞儀をして、急にこみ上げるものがあって、顔を伏せたまま部屋の中に入り、うつむく。
その満の頭にハンチング帽がのる。
ふと満が顔をあげると、加代子が笑いながら、ハンチングを動かしながら、満を正面から見て、
加代子「案外、似合ってるんじゃない？」
満「……」
満、ハンチングを深く被ってみる。
加代子「うん、いける」
満、壁の鏡を覗く。父のハンチングを被った自分を見つめ、涙を拭く。
宏も見て、
宏「うん、いいじゃん。かぶりなよ、それ」
満「……」

78　函館・市電の中

路面電車の中、座っている満と加代子。

二人、窓外の流れる函館の景色に目を向けている。
しばらく無言の二人。
加代子「わたしね」
満「……？」
加代子「言われたんだ、お義父さんに」
満「（加代子の横顔を見て）ん？」
加代子「ダメなやつだけど、ねばってみてくれって」
満「……」
加代子「そのうちなんとかなるからって」
満「……（苦笑い）」
加代子「お義母さんの七回忌のときにさ、満がトイレに行ってる間に」
満「そっか……」
間があって――。
満「親父の若い頃のこと、今さらだけど、少し想像できるようになったよ」
加代子「……（満の横顔を見る）」
満、函館の景色を吸い込まれるほどに見つめる。

79　工場裏の空き地（満のイメージ）

満の想像のシーン。
約六十年前。夏の盛り。夕暮れの濃い橙色の陽射し。函館の片隅の空き地。鉄工所からの機械の音や溶接の音が響く。空き地には鉄屑が無造作に置かれている。
そこに、一人で立っている青年（18）。ハンチングを深めにかぶり白い開襟シャツを着ている。それは宗彦だ。

額にはうっすらと汗が滲み、首がしっかりと太く、眉は凛々しく、目は深く濃い色をしている。
背中から足音が近づいてくる。
宗彦は、ゆっくりと振り返る。
細身で足が長く髪をポマードで撫で付けた青年（18）が近づいてきた。
洗練された身なり。宝生匠だ。
陽に染まった二人。影が長くのびている。
宝生「なんだよ、用事って？」
宗彦「お前、タカシの女に何した？」
宝生「女？　誰のことだよ」
その瞬間、宗彦は右手を素早く振り、その拳は宝生の青年の鼻筋を打った。
鼻から赤く血が流れる。宗彦はボクシングの構えを崩さず、睨む。宝生は宗彦に子供のような目で笑いかけた。それを見て宗彦は少し力を緩めた。次の瞬間、宗彦の左頬を匠の拳が打った。宗彦はよろけ、匠はステップを踏みながら近づいた。
「おいっ、お前ら何やってんだ！」
と鉄工所から大人の声が響く。
何人かの工員たちが駆けてきて、二人、別々の方に跳ねるように走りだす。
宗彦、ハンチングを軽く片手でおさえて。

80　東京の街並

日々が過ぎて――――。

81　中野・パブ『エイト』・中

満、カウンターでビールを飲みながら壁にかかるテレビでサッカーを観ている。マスターの伊達が満に、

伊達「杉本さん」

満「ん？」

伊達「聴いたよ、ラジオ。ここでさ」

満「え、あ、どうも」

伊達「よかったよ」

満「……（照れて頭をかく）」

伊達「俺も親父に殴られたことあってさ。……もう逝っちゃったけど。いろんなことと思い出したよ」

満「……（うなずく）」

伊達「またああいうの、書いてよ」

満、笑顔でうなずく。

伊達、柔和な目でグラスを拭いている。

満「マスター」

伊達「ん？」

満「もう泣きごとは言わないよ」

伊達、笑っている。

82　東京・橋の上（夜）

満、神田川にかかる小さな橋の、灯りの下を歩いていく。

向こうから、自転車に乗った警察官がやってくる。

満は、ハンチングをとり、ぺこり頭を下げ挨拶する。

警官は、怪訝な顔で去って行く。

満も頬を緩め、歩いていく。

83　東京の街中（夜）

満、穏やかな目をして歩いていく。

父のハンチングをかぶって。

【了】

本電子書籍は、2017 年 12 月1日発行の『第 23 回函館港イルミナシオン映画祭 2017 第 21 回シナリオ大賞・受賞作シナリオ集』より、準グランプリ受賞作品を抜粋したものです。
シナリオ集のお求めや、作品の映像化につきましては、本映画祭函館事務局までお問い合わせください。

第 23 回函館港イルミナシオン映画祭 2017
第 21 回シナリオ大賞 準グランプリ受賞作品

函館ハンチング

作：松本　稔

※本作品の無許可掲載・転用を禁止します

2018 年 2 月 1 日　電子書籍版発行
発行：函館港イルミナシオン映画祭実行委員会 函館事務局
〒 040-0055　函館市末広町 4 番 19 号（函館市地域交流まちづくりセンター内）
電話　0138-22-1037　http://hakodate-illumina.com/
制作：株式会社新函館ライブラリ
〒 040-0051　函館市弁天町 4 番 8 号
電話　0138-84-1620　http://www.nhakodate.com/